

SHOW-HI SYシネマフルーツ

★★★★★

焼肉 ドラゴン

2017年／日本映画
配給：KADOKAWA、ファンタム・フィルム／128分
2018（平成30）年6月23日鑑賞 TOHOシネマズ西宮OS



監督・脚本・原作：鄭義信

原作：戯曲『焼肉 ドラゴン』

ノベライズ小説『焼肉 ドラゴン』（角川文庫）

出演：真木よう子／井上真央／大泉洋

／桜庭ななみ／大谷亮平

／ハン・ドンギュ／イム・ヒ

チョル／大江晋平／宇野祥

平／根岸季衣／イ・ジョンウ

ン／キム・サンホ

み ど こ ろ

1967年に大阪大学に入学した私が、学生運動から司法試験に人生を切り替えた1969～1970年当時、大阪国際空港の南側にあった“焼肉 ドラゴン”を舞台に繰り広げられる家族の物語は、笑いと涙、そして感動でいっぱい。

父親にも母親にも似ていない3人の美しい娘たちの恋のお相手は？そのドタバタぶりは？あのバラックを見れば、どう見ても国有地を不法占拠した店だが、この家族とそこに集まる在日韓国人たちのエネルギーはすごい。大阪万博を契機として更に日本が高度経済成長に向かおうとする時代、立退きを余儀なくされ、家族がバラバラにされても、なお明日に向かう前向きの姿勢は不变だ。たとえ、離れることになっても家族の心はひとつ！

『屋根の上のバイオリン弾き』にも共通する民族の悲哀の中、どこまでも家族の絆を信じ明るい明日に向かって生きる6人家族のたくましい生きザマから、人口減少社会に向かう今の私たち日本人も元気をもらいたいものだ。

■■1969年、梅田には珉珉、ここには焼肉 ドラゴン！ ■■

1949年生まれの私は、1967年4月に愛媛県松山市の故郷から大阪大学法学部に入学するべく、関西汽船で瀬戸内海を渡って大阪市港区の弁天町に着き、JR大阪駅、阪急梅田駅を経て阪急宝塚線の牧落駅にあった下宿に落ち着いた。1970年3月から6ヶ月間、千里で開催された大阪万博は日本中を巻き込む大イベントになったが、当時すでに学生運動から司法試験勉強に切り替えていた私は1度行ったきりで、その流れに乗ることはなかった。しかし、とりわけ大学1年生の時の私は「ベトナム戦争反対！」等のシュプ

レビコールを繰り返しながら、大阪でのデモ行進に何度も参加し、その終了後には梅田にあった中華料理屋によく行ったが、その1つが“珉珉”。“珉珉”の名物料理は餃子だが、同店は安くボリュームがあることで有名だった。

他方、1971年10月に司法試験に合格し、1972年の4月から第26期司法修習生になった私は、同年7月から始まった大阪での実務修習で堂島法律事務所に配属され、指導教官が木村保男弁護士になった。12期の木村弁護士は当時、大阪国際空港公害訴訟の弁護団長として優秀な弁護団を率いて大奮闘していた。そのことに惹かれた私は当然のように司法修習生の立場ながら同弁護団のお手伝いをすることになり、空港の着陸側になる豊中市側と、離陸側になる兵庫県川西市の現地へ何度も行き、原告ら被害住民たちとの交流を深めた。元々1本（A滑走路）だけだった大阪国際空港の滑走路は、1970年2月に大型ジェット機の就航を可能とする3000メートルのB滑走路がもう1本作られたが、そのための拡張については、民家の立退き問題等さまざまなトラブルがあつたことを私はよく聞かされていた。

しかし、私が大学2年生で、ちょうど20歳になった1969年当時、梅田には安くボリュームのある中華料理店“珉珉”があれば、大阪国際空港南側の豊中地区（の多分、走井地区）には、韓国のホルモンの店“焼肉 ドラゴン”があつたらしい。大学2年生の時にそれを知つていれば、きっと頻繁に通つていたはずだと思うと、少し残念・・・。また、トコトン人情物語に重点を置いた本作では、タイトルにもかかわらず、肝心の“焼肉 ドラゴン”の名物料理を食べるシーンがまったく登場してこないのが少し残念。舞台ではそのシーンは難しくても、映画では撮影するのは容易だから、鄭義信監督には是非そのシーンを入れて欲しかったが・・・。

■口■経営者は？家族は？なぜ“僕”はそこが嫌い？■口■

“焼肉 ドラゴン”の経営者は、韓国人ながら日本の戦争のために左腕を失った後に店を始めた金龍吉（キム・サンホ）。本作冒頭のスクリーン上には“焼肉 ドラゴン”がある町の風景が映し出されていくが、そこを歩いている中学生の“僕”＝時生（大江晋平）は、この町と町の人たちが嫌いらしい。それは一体なぜ？

「住めば都」という言葉があるものの、本作冒頭のこの風景を見れば、龍吉の世代はともかく、中学生の時生の感覚ではこんな汚くてやかましい町は嫌なのはごもっとも。そこで不思議なのは、ブラックのような自宅兼店舗で暮らしている、長女・静香（真木よう子）、次女・梨花（井上真央）、三女・美花（桜庭ななみ）がいざれも美人であること。もっとも、龍吉と太っちょおばさんの英順（イ・ジョンウン）は互いに子連れの再婚。静香と梨花は、龍吉と亡くなった先妻との子供。美花は英順と前の夫との子供。時生だけが再婚した龍吉と英順の間の子供だ。

ちなみに、三島有紀子監督の『幼な子われらに生まれ』（16年）（『シネマ40』102頁）

では、浅野忠信演じる夫と田中麗奈演じる妻は互いに子連れの再婚で、新たに夫婦間の子供が生まれる中で家族を巡るドラマティックな問題点が急浮上してきたが、さあ、「焼肉ドラゴン」に結集するこの6人家族は・・・？本作も『幼な子われらに生まれ』と同じように互いに子連れ同士で再婚同士の両親だが、その両親と4人の子供たちの家族の絆は強い。そして、それがトコトン本作のウリで、『幼な子われらに生まれ』とは大違ひなので、そこに注目！

■■本作v/s『ALWAYS 三丁目の夕日』■■

山崎貴監督の『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年) (『シネマ9』258頁) の時代は、東京タワー建設中の昭和33(1958)年。舞台は、東京の下町にあるちっちゃな自動車修理工場「鈴木オート」だった。戦後復興を終えた日本が高度経済成長に向かう始めたその時代、“テレビ、洗濯機、冷蔵庫”という“三種の神器”に憧れた日本人は、堤真一扮する鈴木オートの社長のみならず、皆よく働いたものだ。堤真一と薬師丸ひろ子が演じる鈴木夫婦は、井沢八郎が歌った『あゝ上野駅』がピッタリの、青森駅から「金の卵」として鈴木オートにやってきた堀北真希扮するイモ姉ちゃん(?) 星野六子を我が娘のようにかわいがっていたが、本作の龍吉と英順が3人の娘と1人の息子に対して見せる愛情もタイアップこそ「静と動」と正反対だが、鈴木夫妻と同じ。つまり、親の子供に対する愛情は日本でも韓国でも同じ、ということだ。

しかし、『ALWAYS 三丁目の夕日』の1958年当時は日本経済全体が急激に右肩上がりを始める古き良き時代だったが、1969年当時、大阪国際空港の南側にあつた“焼肉ドラゴン”を営む在日韓国人たちの未来は？龍吉は「俺の土地は醤油屋の佐藤さんから買った」と主張していたが、買収交渉にやってきた市役所の担当者の話によると、そこは明らかな国有地。私が司法修習生の時に聞いた話もそうだった。ちなみに、私は1984(昭和59)年に、大阪駅前第2ビル再開発問題研究会に参加した後、市街地再開発事業を中心とする都市問題をライフワークにするようになったが、戦後はバラック建て木造住宅も散見していたJR大阪駅前の一等地である5.5haの土地を、第1～4ビルを中心とした4つの超高層ビルに生まれ変わらせたのが、大阪駅前第二種市街地再開発事業だ。その結果、私が大学生時代に通っていた“珉珉”も立退きを余儀なくされたが、ひょっとして“珉珉”も“焼肉ドラゴン”と同じように国有地を不法占拠していたのかも・・・？

『ALWAYS 三丁目の夕日』は、その後『ALWAYS 続・三丁目の夕日』(07年) (『シネマ16』285頁)、『ALWAYS 三丁目の夕日'64』(12年) (『シネマ28』142頁) とシリーズ化され、六子も嫁入りするまでになったが、さて国有地からの立退きを迫られている“焼肉ドラゴン”は？そしてまた、六子は自分の選択と鈴木夫妻のお眼鏡が一致した結婚だったが、“焼肉ドラゴン”的三姉妹それぞれの男の選択は？結婚への道は？

■□■本作ｖｓ『屋根の上のバイオリン弾き』■□■

谷崎潤一郎の『細雪』とルイーザ・メイ・オルコットの『若草物語』は4人姉妹の物語だが、本作とミュージカル『屋根の上のバイオリン弾き』には、結婚適齢期の3人娘が登場する。『屋根の上のバイオリン弾き』では、長女は父親の反対を押し切って頼りない仕立屋と無事結婚するが、次女は革命を夢見る学生闘士と恋仲になり、逮捕された彼を追ってシベリアへ発ち、三女はロシア青年とロシア正教会で結婚して駆け落ちしてしまう。このように、ユダヤ教の戒律を厳格に守りながらつましくも幸せな毎日を送る父親とその妻からタップリの愛情を注がれていた3人の娘たちは、それぞれ波乱万丈の男関係を展開するが、それは本作も同じだ。

なぜ私がここでそんなことを書くのかというと、私は本作のテーマの1つである在日韓国人の差別と迫害、そしてそれを前提とした龍吉・英順世代の生き方と結婚適齢期の娘たちの生き方、さらに進学校に入学した時生が学校でのイジメに耐え切れず自殺してしまう在日中学生の生き方、それらの悲哀を観て、『屋根の上のバイオリン弾き』で描かれたユダヤ人たちの悲哀を思い出したからだ。敬虔なユダヤ教徒の父親テヴィエは5人の娘たちと共に帝政ロシア領のウクライナ地方の小さな村で牛乳屋を営んでいたが、ユダヤ人排斥運動が強まる時代状況の中、彼らユダヤ人家族に安住の地はあるの？大阪の生野区には猪飼野地区があり、そこには在日韓国人がたくさん住んでいた。そして、同区の鶴橋駅周辺は昔も今も韓国風焼肉の名所になっている。しかし、大阪国際空港南側の国有地を不法占拠していた在日韓国人たちは、『屋根の上のバイオリン弾き』のユダヤ人たちと同じように立退きが必至だ。そんな中でも、ユダヤ人の3人の年頃の娘たちはそれぞれお相手を見つけて、さて在日韓国人の3人の年頃の娘たち、静花、梨花、美花は？

■□■舞台で？それとも映画で？きっと両方とも！■□■

松坂桃李が文字通り裸での体当たり演技を見せた三浦大輔監督の『娼年』(17年)は、『愛の渦』(13年)（『シネマ32』未掲載）と同じように、人気の舞台を映画化したもの。両作とも刺激的なセックスとヌードを売りにした舞台だから、きっと衣装代は安上がりだが、役者たちは男優も女優もさぞ大変だっただろう。それに対して、本作は劇作家・鄭義信の舞台『焼肉ドラゴン』を映画化したもので、セックスやヌードを“売り”にしたものではなく、徹底した人情モノだ。鄭義信が演出した舞台『焼肉ドラゴン』は、日本では第8回朝日舞台芸術賞グランプリ、第12回鶴屋南北戯曲賞、第16回読売演劇大賞の大賞・最優秀作品賞、第59回芸術選奨文部科学大臣賞を受賞した素晴らしい舞台だ。また、韓国でも、韓国演劇評論家協会の選ぶ2008年今年の演劇ベスト3、韓国演劇協会が選ぶ今年の演劇ベスト7など、数々の賞を受賞しているそうだ。

そんな舞台『焼肉ドラゴン』が映画化されたことについては、①2018年6月12日

付日経新聞夕刊、②同月15日付日経新聞夕刊、③同月19日付朝日新聞等が大きく取り上げて、同作や鄭義信監督について解説している。さらに、同作で梨花役を演じた女優・井上真央も④6月29日付朝日新聞夕刊で「今までにない攻めの私」という見出しで本作出演の意義を語っているから、マスコミの本作への注目度はすごい。

近時はミュージカルの名作『オペラ座の怪人』や『レ・ミゼラブル』等も、また、さまざまな名作舞台も映画化されているが、さて本作は舞台で？それとも映画で？私は舞台は観ていないが、その答えはきっと、“両方ともグッド！”だろう。

■□■この男の長女、次女の選択は？北、南の選択は？■□■

『探偵はBARにいる』(11年)『シネマ27』54頁)、『探偵はBARにいる2ススキノ大交差点』(13年)『シネマ31』232頁)での大泉洋は取り立てて言うほどのものでもないが、本作に見る彼の演技はさすが。2016年のNHK大河ドラマ『真田丸』でも彼は、堺雅人演じる幸村の兄、真田信幸役を見事に演じていた。そんな大泉が、本作では次女・梨花との結婚の失敗に気付き、ケンカを繰り返しながら結局ホントに大好きな長女・静花にしつこく求婚する大酒飲みの在日韓国人、哲男役を人間味タップリに演じている。『屋根の上のバイオリン弾き』の長女の結婚相手になった仕立屋の男モーテルも頼りなからったが、彼の場合は誠実さと実直さだけはピカイチだった。それに対して、哲男は頼りないだけでなく、大酒飲みで常連客といつもどんちゃん騒ぎをし、ろくに仕事にも行かなかったから、口が達者で男に対する要求度が高いしっかり者の次女・梨花にはもともと釣り合わなかつた男だ。

そんなダメ男の典型的のような男が、静花に一目ボレした尹大樹(ハン・ドンギュ)が猪突猛進に彼女にアプローチしてくると、俄然対抗心を燃やしてハッスル。恥も外聞もかなくしてて、泣きながら、すがりつきながら、「好きだ、好きだ、好きだ」と繰り返すと、さあ静花の手は・・・？“両手に花”状態の静花は、妹の梨花に対する遠慮もあって、容易に自分の本意に従うことができなかつたが、コトがここまで進むと、さあその選択は・・・？

他方、梨花の場合は割り切りが早いから、ダメ亭主の哲男とは離婚だ。そう決めてしまうと、ある事件がきっかけで急接近してきた男・吳日白(イム・ヒチョル)とすぐにねんごろに。その変わり身の早さは多少心配だが、何ゴトにも慎重なタイプの長女に対し、何ゴトも決定が早く即行動が梨花のやり方。

このように、結局哲男の嫁の選択は長女の静花に落ち着いたが、“焼肉ドラゴン”の立退きが迫る中、哲男の次なる人生の選択は北朝鮮に行くこと。しかし、少し前までは「北は夢の楽園」と言っていたが、最近聞くところによると悪い噂もあるのでは？そんなところに哲男のような頼りない男が新天地を求めてホントに大丈夫？今から見ると当然、哲男のこの選択は大間違いだったが、その時点ではそれは神のみが知ることだ。

■□■三女の結婚は？母は猛反対だが、龍吉は？■□■

同じ父親・龍吉の娘なのに、長女・静花と次女・梨花の性格は正反対。また、三女・美花は母親・英順の連れ子だが、こちらも静花と梨花とは全く異質の自由奔放な娘。自由気ままでお調子者の美花の夢は、歌手になることだ。高度経済成長時代に入ろうとする日本では、1970年の大阪万博当時、キャバレーが大はやりだった。私は司法修習生時代に、大阪の難波にあるキャバレーに数回行ったことがあるが、当時はキャバレーの他にアルサロ（アルバイト・サロン）という怪しげな雰囲気の店もあったし、キャバレーのサービスもピンキリだった。もちろん、大きなフロアの大きなソファにどっしりと座り、生演奏で歌う歌手の歌声を聴くのが一番オーソドックスな楽しみ方だが、実はお楽しみはそれ以外にもいろいろ・・・。

今、美花の恋人になっているのは、そんなキャバレー（ナイトクラブ）で働いている長谷川豊（大谷亮平）。しかし、彼は店の専属歌手の美根子（根岸季衣）の夫だから、美花と長谷川の仲は今で言う“不倫”。フロアの陰でキスをしている姿を歌っている美根子から目撃されるへマも含めて、美花と長谷川の結婚には多くの障害がありそうだ。

それを乗り越えて（つまり、美根子との離婚を成立させて）、正式に「美花を嫁にください」と申し出るために“焼肉ドラゴン”を訪れた長谷川は立派だが、実の母親の英順はそれに猛反対。しかし、いわゆる継父の立場ながら、そこで龍吉が語った重みのある言葉とは？

龍吉役を演じた韓国人俳優キム・サンホは、『ユア・マイ・サンシャイン』（05年）（『シネマ11』257頁）、『ユゴ 大統領有故』（05年）（『シネマ16』126頁）、『黒く濁る村』（10年）（『シネマ25』59頁）等で私にも顔なじみの名優だが、「少し古い話をてもいいか？」と確認した上で、長谷川と美花たちを前に、在日韓国人としての思いの丈をぶちまける約3分間のロングテイクシーンは迫力満点。そこで何度も繰り返される「働いて、働いて、働いて・・・。」の言葉の重みを、私たち日本人はしっかりと受け止める必要がある。ちなみに、帰国断念を回想するキム・サンホのこの長セリフはワンショットで撮られたそうで、その迫力は満点！本作最大の見せ場になっているので、それをしっかりと確認したい。また、前述した新聞記事によれば、母親役を演じたイ・ジョンウンは、撮影の2週間前に1人で来日し、大阪の焼肉店を訪ねるなどして、熱心に役作りをしたそうだ。その甲斐あって、本作では、姿カタチは不細工だが、円熟味と人間味にあふれたこのおばさんの演技にも注目したい。

■□■家族はバラバラ？いやいや、明日への希望が！■□■

“焼肉ドラゴン”の敷地が国有地（の不法占拠）なのか、それとも龍吉がいつも主張するように「醤油屋の佐藤さんから買った」のかという法的論点については、弁護士の私の

目には、どう見ても「国有地は売り買いできません」という市役所の役人の主張の方が正当。したがって、仮に龍吉が佐藤さんから購入したとしても、その主張を通すのは法的に無理だ。多分それは龍吉自身もわかっているのだろうが、いつまでもその主張を繰り返し、強制執行も辞せず！と繰り返す市役所の担当者を追い返そうとする龍吉の迫力には、すごみを感じてしまう。しかし、所詮龍吉の抵抗はムダ。

本作では、いくら立退き料をもらったのかまでは明かさないが、本作のラストは『屋根の上のバイオリン弾き』と同じように、家族がみごとにバラバラに旅立っていくシーケンスになる。つまり、哲男と静花は北朝鮮へ、呉日白と梨花は韓国へ、そして美花だけは小さなスナックを始める夫の長谷川と日本に残ることになったが、両親とは別の生活だ。しかして、自殺してしまった時生の写真を胸に、英順は龍吉が引くりヤカの荷台に座ったが、その重みも含めて（？）この老夫婦の今後の人生は？そう考えると、この両親と4人の子供たちは今やバラバラになってしまった感があるが、いやいやそうではない。大阪万博を経て、日本はさらに高度経済成長に向かうこと確実な情勢だが、龍吉たち老夫婦も、それぞれに人生の伴侶を得た3人の娘たちも、これから前向きな人生に向かっていくことは同じだ。もちろん貧乏は覚悟の上だが、皆が今まで以上に働いて、働いて、働いて、いけば・・・。

人口減少社会を迎える日本全体の縮小が必至となっている2018年の今、私たちは日本の未来に不安ばかり抱いているが、1970年当時の“焼肉ドラゴン”に結集していたこの家族たちの気持ちは「たとえ昨日がどんなでも、明日はきっとええ日になる。」というものだった。さあ、今こそそんな本作を観て、在日韓国人はもちろん、日本人も大いに元気をもらいたいものだ。

2018（平成30）年7月3日記